図表 1

2002.3.10 創文社/長崎純心シリーズ

問題としての神

人間の理性が行う最も根元的で包括的な探求が哲学である．哲学史をふり返ると，「神」と呼ばれる存在は常に，容易には解決できない問題を哲学につきつけてきた．中世哲学のみならず古代哲学と近世哲学も，それぞれの仕方で神の問題と深く関わりながら展開されてきたのである．

ところが，カントの理性批判やニーチェの「神の死」，そして経験主義哲学が絶大な影響を及ぼす現代，理性的探求としての哲学において神は全く問題となりえない，との大前提が疑いなきまでになっている．「哲学の解体」や「反哲学」の試みは，まさしくその傾向を象徴的に反映していると言えよう．

こうした現状のなかで本書は，経験論哲学と形而上学を中心とした著者 30 年の研究を背景に，神こそは問題のなかの問題であると説く．「神のかたどり」としての人間観に基づいて，理性と信仰，哲学と神学の関わりを明快に論じた講演の記録．

近代(モダン)の問題 → ポストモダン
信仰と理性
宗教と哲学
神学と哲学
信じることと知ること
etc

教養 = 学術 + 芸術
芸術 = 造形芸術 + 典礼芸術
芸術 = リベラルアーツ

稲垣　良典（いながき・りょうすけ）
昭和 3 年佐賀生まれ．昭和 26 年東京大学文学部哲学科卒業．九州大学文学部教授を経て，現在，長崎純心大学大学院教授．
〔著訳書〕『トマス・アクィナス哲学の研究』『習慣の哲学』『恵みの時』『抽象と直観』『神学的言語の研究』，トマス・アクィナス『神学大全』第 11～16，18～20，23 分冊（以上，創文社），『トマス・アクィナス』『天使論序説』（以上，講談社），『トマス・アクィナス倫理学の研究』（九州大学出版会）．

（注）

幸福観の変遷

I　伝統的な幸福観の公式

$$幸福 = \frac{物的消費}{欲望}$$

①分母を小さくする幸福観
②分子を大きくする幸福観
③分子<分母を前提に分子分母を拡大する幸福観

II　物質志向から脱物質志向の幸福観の公式

$$幸福 = \frac{所得消費}{生理的・物的欲望} + \frac{所得消費}{自己開発欲望}$$

④分子<分母を前提に分子分母を拡大する幸福観

III　人生80年時代の幸福観の公式

$$幸福 = \frac{所得消費}{生理的・物的欲望} + \frac{時間消費}{自己開発欲望}$$

⑤クオリティの高い商品とクオリティの高いライフスタイルを関係させる幸福観

飯塚茂雄・松田義幸「ゆとり」時代のライフスタイル
p 77　　1989.8.24 日本経済新聞社

① ポール・サムエルソン
② P.サムエルソン → J.S.デューゼンベリー
③④ J.Kガルブレイス
⑤「物の豊かさ」から「心の豊かさ」へ
TO have から TO be へ

＊　この問題に関して現教皇ヨハネ・パウロ二世が一九九八年九月十四日に公布した回勅「信仰と理性」（Fides et Ratio）において、信仰から理性を切り離し、理性による探求を信仰の光に頼る必要のない自らに固有の領域のみに限ろうとする現代哲学の在り方が、繰り返し「偽りの謙遜」false modesty であり、理性の「矮小化」であって、「知恵の探求」という哲学の「哲学」的使命の放棄であり、哲学の崩壊、「偽哲学」として批判されていることは興味深い。理性が信仰から切り離されると、理性は人間の効用（人間中心主義的な価値としての快楽と物質的豊かさ）に奉仕する道具になり下がる傾向を強める。人間の生の全体に関わる究極的真理、根源的真理の探求は閑却ないし放棄され、そのような真理を観想する能力は弱められてしまう。（注）

信仰からの理性の分離の結果として現実に生じるのは理性の自律 autonomy ではなく、理性の自己充足性 self-sufficiency の主張ないし幻想であり、それは哲学の破壊へ導く、と回勅は指摘する。逆に信仰ないし神学は理性にたいして、それ自身を啓示の真理の新しさにたいして開き、探求をおし進めるように挑戦する。信仰は理性を（限界を越えるなと）束縛し、抑圧するのではなく、むしろ（理性）自らを超えて進むよう挑発するのである。信仰は理性を清め、強め、照明することは古くから指摘されてきたが（「信仰と理性」もそれを繰り返す）、信仰は理性が理性であり、哲学的探求が、まさしく哲学的探求であるために必要とされる、という「信仰と理性」の指摘は大いに注目に値する。いいかえると、理性にとって信仰の光を受け入れ、それに従うということは、自らの限界を認め、その意味で自己を否定することであると同時に、（自己超越を通じて）まさしく理性として自らを完成することだ、というのである。[106]

新しい社会へ向けての
Mental Habit

2011年11月11日（金）　日本経済調査協議会　葛西委員会

松田　義幸（尚美学園）

今日のテーマ

① UNESCOとOECDの教育理念

② MRI訪問（1972.1）

③ ポスト産業社会のMental Habit

④ 「新しい人間、新しい社会」への期待

①

UNESCOとOECDの教育理念

UNESCO

LEARNING TO BE (1972)

人間らしく生きることを学ぶ

（Quality Of Life：QOL ）

人間らしい労働

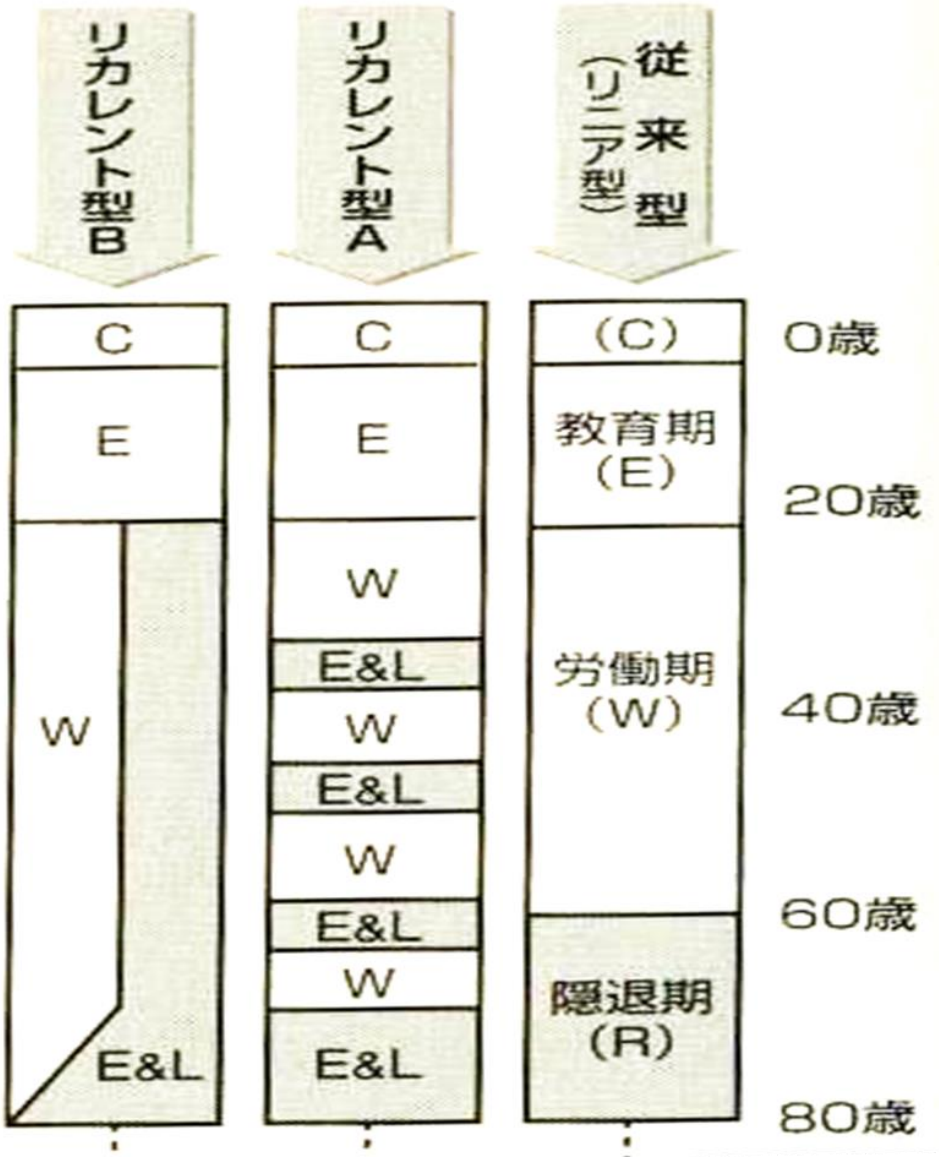
（Work Humanization /

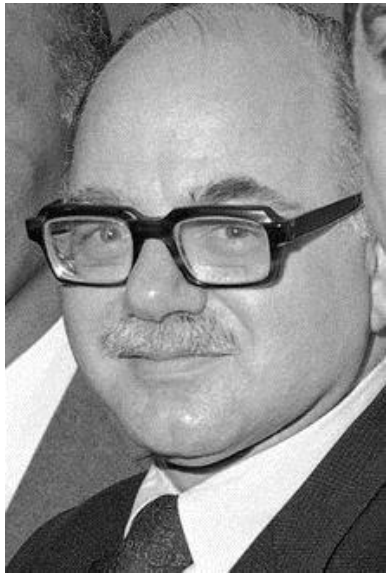
Quality Of Working Life:QWL）

OECD Recurrent Time Budget （‘70s－）

生涯生活時間の
柔軟な配分政策

C:Child
E:Education
W:Work
L:Leisure
R:Retirement





David Riesman **1909 – 2002**

Daniel Bell **1919 - 2011**

Pre-Industrial Society

Industrial Society

Post-Industrial Society

産業社会への警告

ローマクラブ

成長の限界（1972）

R.M.ハッチンス

Learning Society（1968）

②

MRI訪問（1972.1）
ーNIRA立ち上げに向けてー

※米国カンサスシティ
Midwest Research Institute
（ 現MRIGlobal）

Leisure Project研究の新視点

Mental Habit / Habitus Mentaris

精神の習慣・心の習慣

ある時代、ある社会における、

人々に支配的な、

ものの考え方・見方・感受性

E.パノフスキー『ゴシック建築とスコラ哲学』

具体例：

イヌイックのMental Habit

雪・氷・冷たさ・寒さ・色・かたち・硬さ・厚さ

についての多様な言語表現

実在とは言葉の関数

by ベンジャミン・ウォーフ

産業社会のMental Habit

時は金なり / 小人閑居して不善を為す

Work, labor, business, occupation, vocation, calling, toil, pain, travail, hardship, suffering, difficulty, trial, effort, industory, duty, try, earnest etc….

つとめる

力、働、努、励、孜、職、労、勉、業、
役、務、強、勤…

努力、労働、労力、労務、労役、勉強、
強力、業務、職務、職業…

産業社会のMental Habit

わたしたちは

働くために生きている

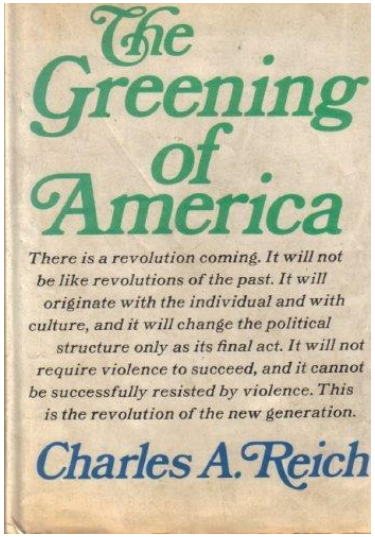
↑

Youth Culture, Counter Culture

自由、解放、人間性回復、自己の探究…

The Greening of America (1970)

Charles A. Reich (1928 -).



ポスト産業社会のMental Habit

冒険・旅・セックス・自然・崇敬心・魔術性・神秘性・畏敬心・ミュージック・四季の楽しみ・自己実現・調和・友情・連帯・超越・神話・表現の自由・ドラッグ・演劇・映画・解放

ウッドストック、イージーライダー、ビートルズ、プレスリー、ヒッピー、エデンの東、『ライ麦畑でつかまえて』…

東洋のMental Habit、禅のMental Habitへの憧れ

若者たちにとって
産業社会で生きること

失楽者、失楽園

アリストテレスのレジャー論

「一生懸命働くために
anapausis (recreation) と
paidia (amusement) を求める」

（『倫理学』1176b）

アリストテレスのレジャー論

「私たちは平和を求めて戦争をするようにschole (leisure) を求めて、ascholia（work) に従事しているのだ。」

（『倫理学』1177b）

アリストテレスのレジャー論

i ） anapausis → recreation

ii ） paidia → amusement

iii ） schole → leisure,school

iv ） schole - noble, honorable（教養・全体知）

ascholia - necessary, useful（技術・専門知）

※ (G) schole → school

(L) licere → leisure / license

③

ポスト産業社会のMental Habit

余暇開発センターの設立（1972）

ミヒャエル・エンデ『モモ』

時間泥棒（産業社会のメカニズム）のセールストーク

時間貯蓄こそ幸福への道
時間貯蓄をしてこそ未来
がある
君の生活を豊かにするた
めに時間を貯蓄しよう
時間は貴重だ
時は金なり　貯蓄をせよ

「悠々閑々」礼賛

十三世紀　中国・南宋の詩人

文天祥

忙裏山我を看る
閑中我山を看る
相似て相似ず
忙は全て閑に及ばず

人生80年70万時間

（24h×365d×80y）

生涯労働時間

7万時間＝人生の1割

1800h/y×40≒7万h

生涯自由時間

21万時間＝人生の3割

70万h－7万h－生理的･必需的時間≒21万h

workday vs holiday

holiday → holy + day

holy = whole / health, sound, nature

perfect, happy, peace

workday → part / productivity, efficiency

busy → business

be occupied → occupation

※（日本においても）忙＝忘

心を生かすか亡うか

ｉ）　失業者unemployment ／

失楽者unemplayment

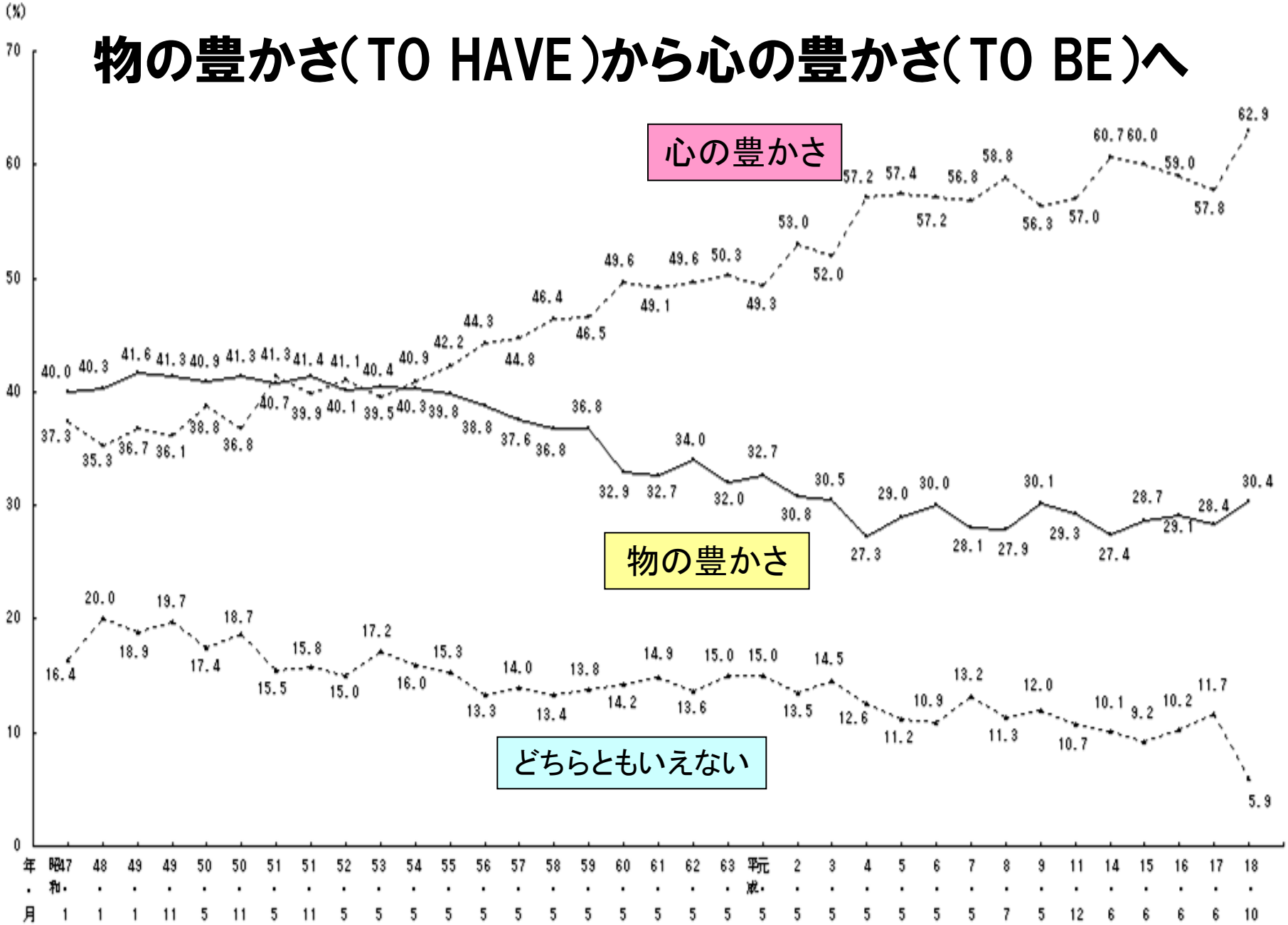
ｉｉ）　シグナル・コミュニケーション→

シグナル行動→シグナル人間

ｉｉｉ）　シンボル・コミュニケーション→

シンボル行動→シンボル人間

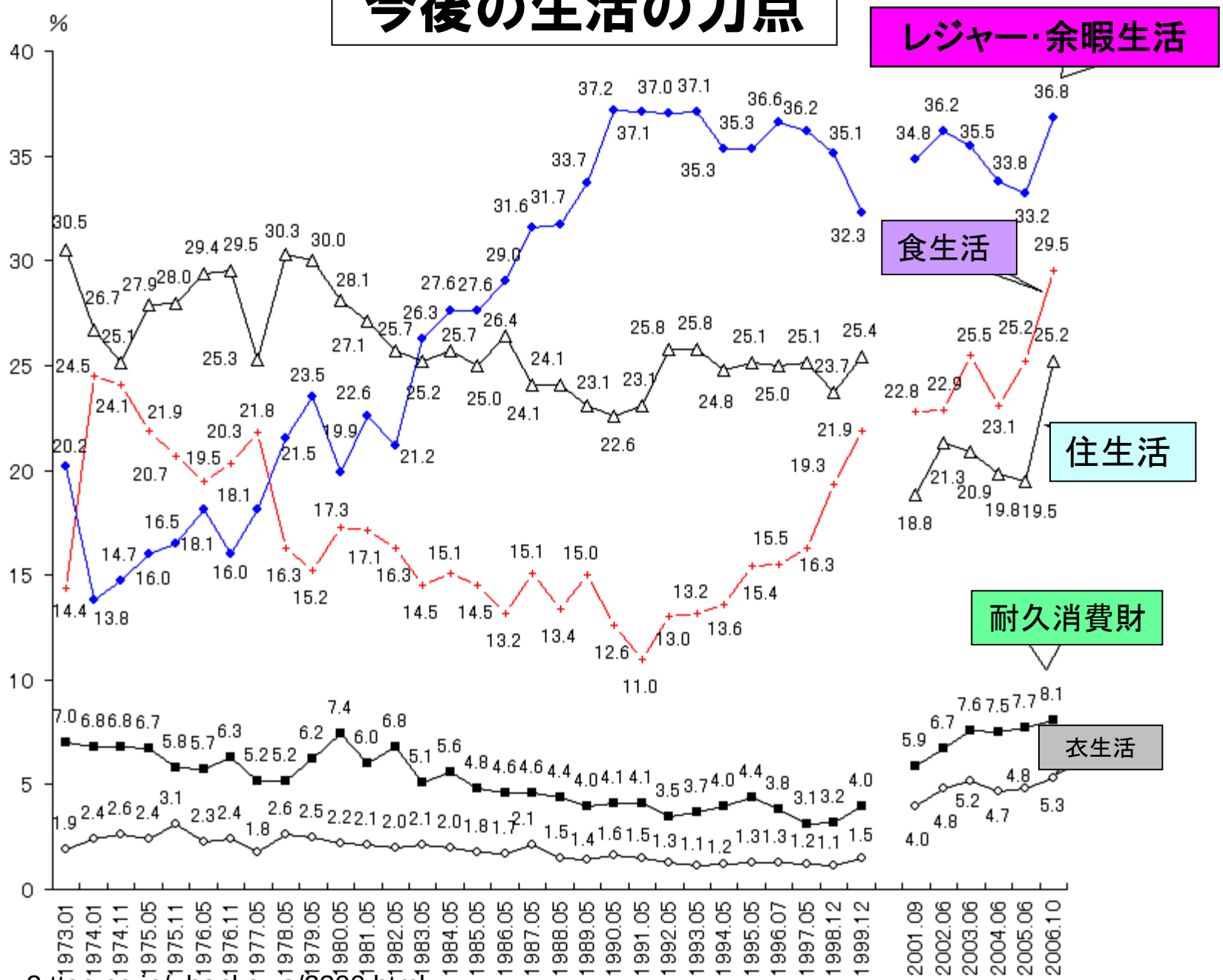
物の豊かさ(TO HAVE)から心の豊かさ(TO BE)へ



(注) 心の豊かさ → 「物質的にある程度豊かになったので，これからは心の豊かさやゆとりのある生活をすることに重きをおきたい」
物の豊かさ → 「まだまだ物質的な面で生活を豊かにすることに重きをおきたい」

内閣府 「国民生活に関する世論調査」より

今後の生活の力点



http://www2.ttcn.ne.jp/~honkawa/2300.html

３世代のMental Habitの変遷

祖父母の時代

「**勤勉－節約**」**の価値観**・・・・・レクリエーション

父母の時代

「**所有－消費**」**の価値観**・・・・・レクリエーション

+**アミューズメント**

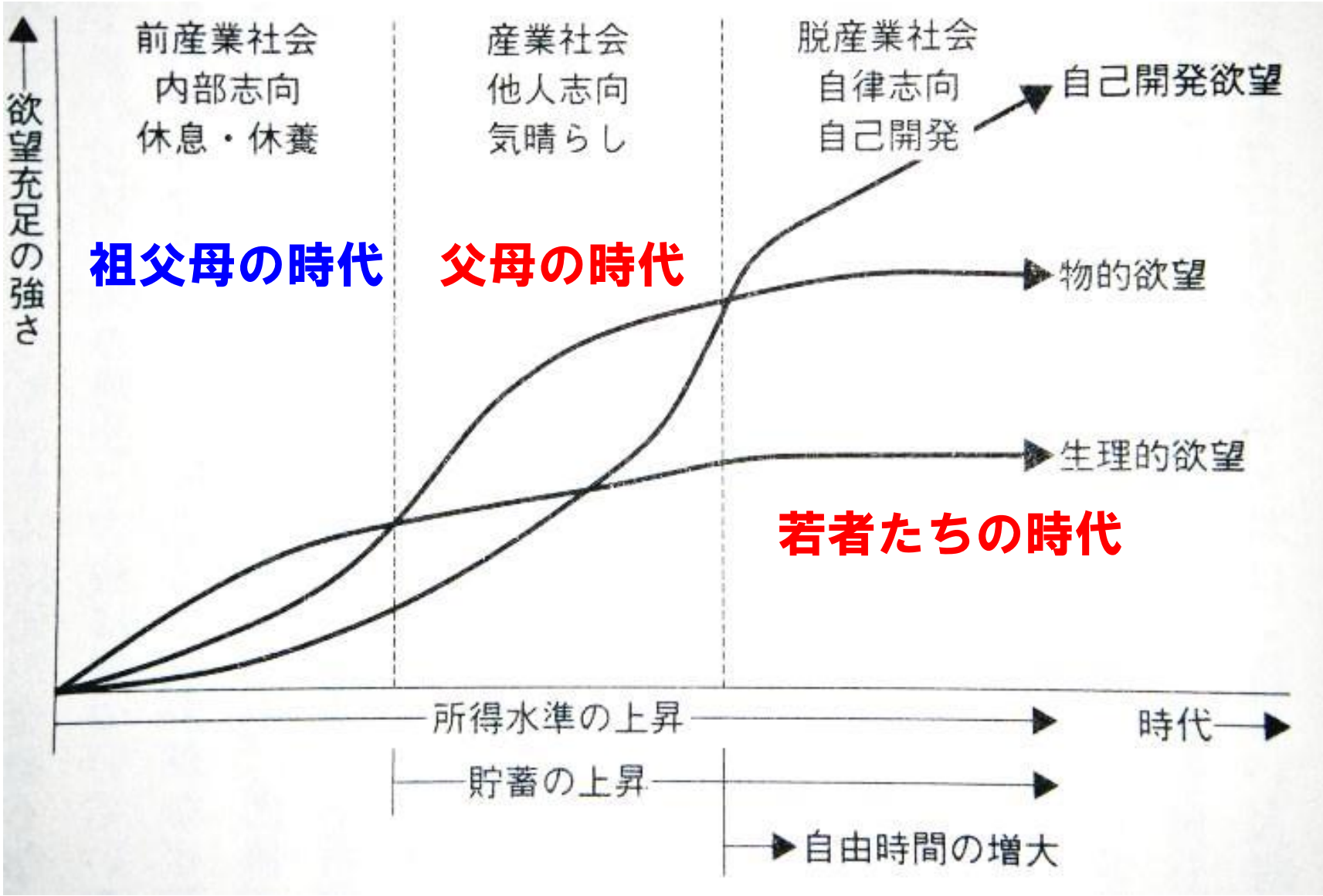
若者たちの時代

「**存在－自己開発**」**の価値観**・・レクリエーション

アミューズメント

+**レジャー**

欲望の大きな変化


欲望充足の強さ
前産業社会
内部志向
休息・休養
産業社会
他人志向
気晴らし
脱産業社会
自律志向
自己開発
自己開発欲望
祖父母の時代
父母の時代
物的欲望
生理的欲望
若者たちの時代
所得水準の上昇
時代
貯蓄の上昇
自由時間の増大

第3ステージ「新しい人間、新しい社会」

ステージ	社会類型	ライフスタイル類型	社会経済理論	自由時間の過ごし方
第1ステージ	前産業社会 pre-industrial society	「勤勉－節約」論理 内部志向＆意識Ⅰ 生理的欲望の充足	古典経済学 (invisible hand)	レクリエーション (anapausis)
第2ステージ	産業社会 industrial society	「所有－消費」論理 他人志向＆意識Ⅱ 物的欲望の充足	近代経済学 (visible hand) 近代経営学 “TO HAVE” marketing	レクリエーション ＋ アミューズメント (paidia)
第3ステージ	脱産業社会 post-industrial society	「存在－自己開発」論理 自律志向＆意識Ⅲ 自己開発欲望の充足	New Economics(?) “TO BE” marketing	レクリエーション ＋ アミューズメント ＋ 創造的レジャー (schole)

④

「新しい人間、新しい社会」への期待

a. M.ケインズからの21世紀への手紙

b. J.K.ガルブレイスの日本社会への提言

c. ユネスコの21世紀教育政策
「Learning to be」

d. R.M.ハッチンスの
「学習社会（Learning Society)

a.　M.ケインズの
「わが孫たちの時代の経済的可能性」（1930）

経済の問題よりも、人類の永遠の問題である
レジャー問題が重要になるであろう。

レジャー生活　＞　ワーク生活

文化経済学
有効価値　＝　***f***（<u>固有価値・享受能力</u>）

b.　J.K.ガルブレイスの
「日本の再設計ー新しい価値観に対応」

ｉ）　経済的成功の意味を問い直すとき

ii）　Quality of Life の向上ー

スポーツ、芸術、　文学、学問、旅行、

園芸、趣味、生活文化の楽しみ

iii）　新しい価値尺度　ー

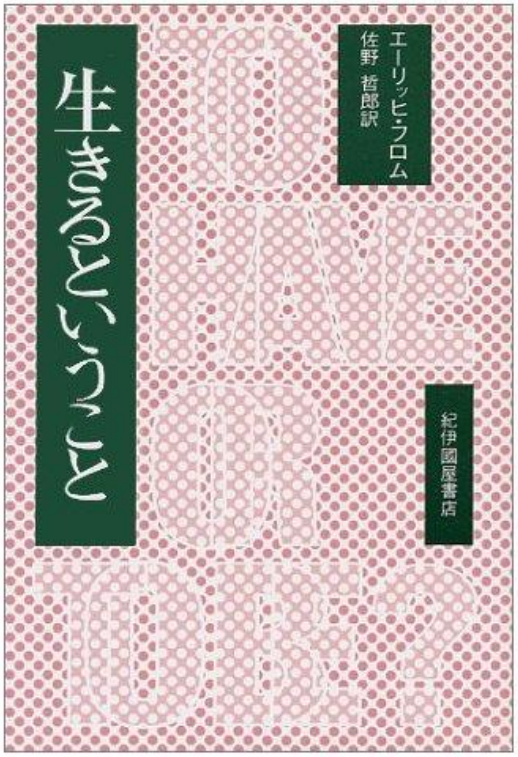
「生活の楽しみ」「幸福の追求」

c.ユネスコの21世紀教育政策

ｉ） 人間らしく生きることを学ぶ
Learning to be

ii） To haveの価値観から
To beの価値観へ
（by E.Fromm)

iii） 生涯教育から生涯学習へ



d. R.M.ハッチンスの「学習社会」（Learning Society)

ｉ） 教養教育・自由学芸教育の重要性

ⅱ） M.J.アドラーとのGreat Books運動の推進

ⅲ） Great Books, Great Ideas

判断基準ー真理（Truth)善（Goodness)美（Beauty)

行為基準ー自由（Liberty)平等（Equality)公平（Justice)

知と教養のありかたをめぐって

今道友信 東京大学名誉教授

ひとりの人間としての魂の世話を忘れてはならない （ソクラテスの哲学観）

小宮山 宏 東京大学総長

東京大学アクションプランのキーワード

自立分散（専門知）協調（総合知・教養）系

※生命体モデル

9,000の開設科目と全体像（教養）の調和

古典（Classic）に学ぶことの意義

Classicの語源はラテン語のclassicus。国家の危機に際して艦隊（classis）を寄付する富裕な人たち。転じて、classicは人生の危機に際して、精神の力を与える書物や芸術の古典を指すようになった。

今道友信著『ダンテ「神曲」講義』（みすず書房）

まとめ

① UNESCOとOECDの教育理念
② MRI訪問（1972.1）
③ ポスト産業社会のMental Habit
④ 「新しい人間、新しい社会」への期待

資料:

TO BE OR NOT TO BE

THAT IS THE QUESTION

Humlet By Shakespeare

TO BE OR NOT TO BE

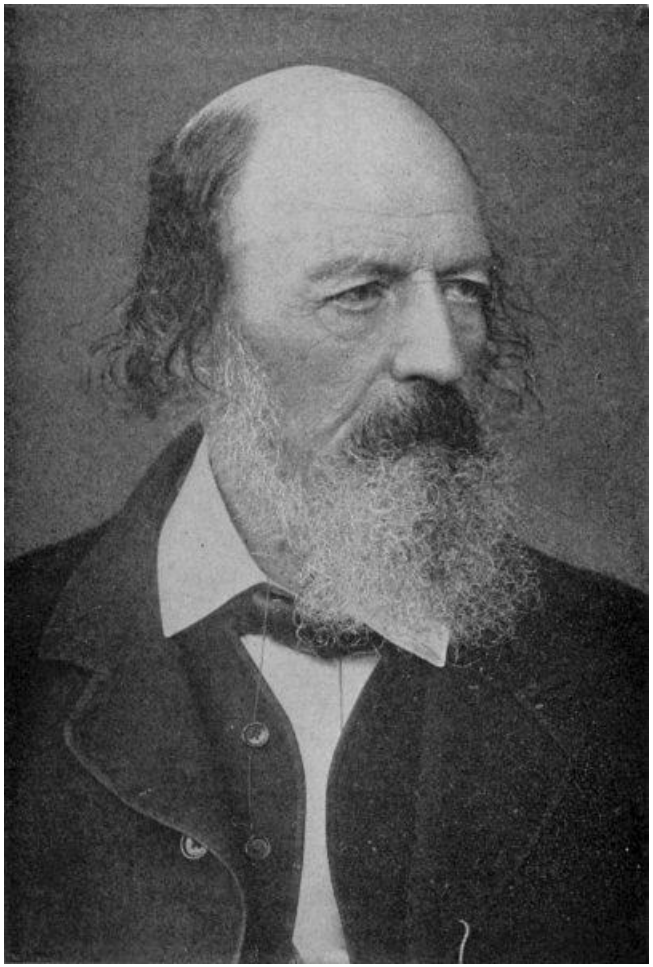
THERE IS NO QUESTION

By Daisetsu Suzuki 1959年 ハワイ大学東西哲学者会議

TO HAVE OR TO BE

By Erich Seligmann Fromm

TO HAVE



アルフレッド・テニスン

（1809-1892）

イギリス

ヴィクトリア朝時代の詩人

Flower in the crannied wall,

I pluck you out of the crannies,

I hold you here, root and all, in my hand,

Little flower -but if I could understand

What you are, root and all, and all in all,

I should know what God and man is.

TO HAVE OR TO BE

By Erich Seligmann Fromm

ひび割れた壁に咲く花よ
私はお前を割れ目から摘み取る
私はお前をこのように　根ごと手に取る
小さな花よ―もしも私に理解できたら
お前が何であるのか　根ばかりでなく　お前のすべてを
その時私は神が何か　人間が何かを　知るだろう

（訳　佐野哲郎）

TO BE

松尾芭蕉(1644-1694)

眼をこらして見ると
なずなの咲いているのが見える
垣根のそばに！（訳　佐野哲郎）

When I look carefully
I see the *nazuna* blooming
By the hedge!

translated by E. fromm

原作
よく見れば　なずな花咲く垣根かな

西行の和歌における、宗祇の連歌における

雪舟の絵における、利休が茶における

その貫道するものは一つなり。

しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて

四時を友とす。

「笈の小文」

資料

新しい社会へ向けての
Mental Habit

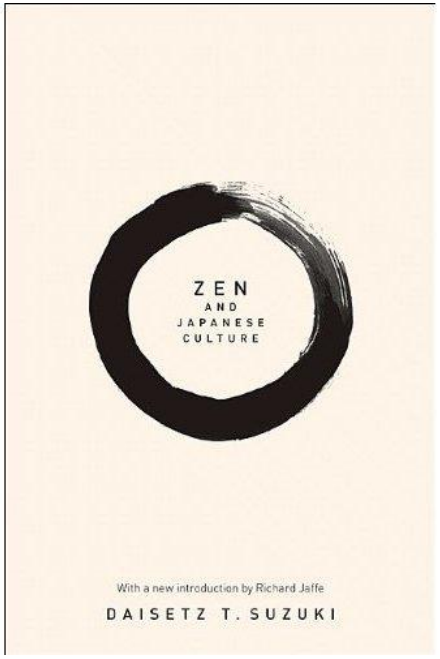
2011年11月11日（金）　日本経済調査協議会　葛西委員会

松田　義幸（尚美学園）

鈴木大拙

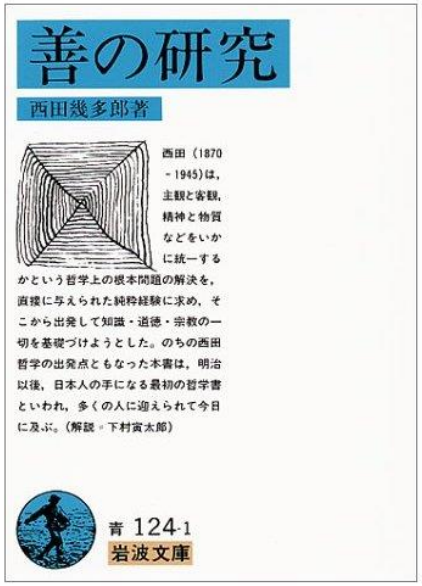
『禅と日本文化』

Zen and Japanese Culture



西田幾多郎

『善の研究』



上田閑照先生

「鈴木大拙」研究

上田閑照・岡村美穂子著

『鈴木大拙とは誰か』

（岩波現代文庫）

禅のモットー　不立文字

真に「伝え難き」もの
untransmittable

言葉に頼るな
no reliance on words

不立文字を言葉で説明

（はっきりしてよいところははっきりしてみる）

禅体験（無分別体得／言葉を絶したところ）

↓

禅意識（無分別の分別／言葉になった自覚の意識）

↓

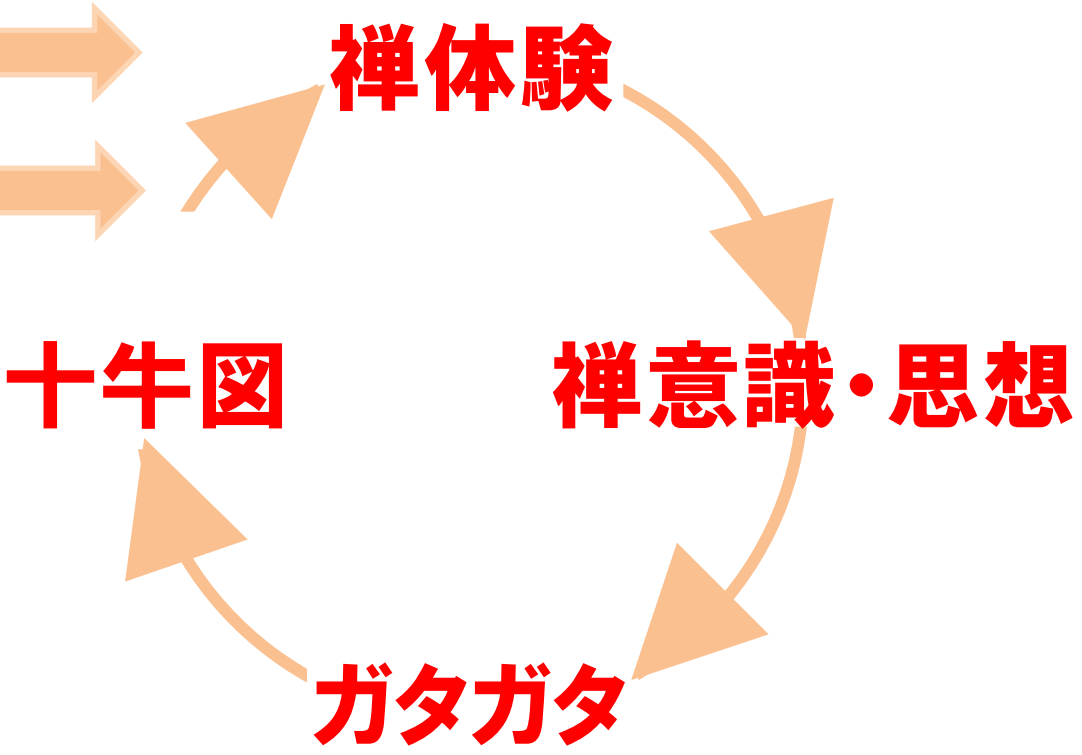
禅思想（「禅体験－禅意識」の構造と意義）

禅とは卓子を「ガタガタ」動かすこと

言葉・意識を超越する
禅体験の原初からの自由反復

一級の禅体験

禅と日本文化



禅とは何か

人間の心の底にある無限の産み出す力

インド仏教

↓

唐代・宋代

中国禅（中国の儒教・道教風土）

↓

鎌倉時代

禅と日本文化（日本の造化思想・風土）

日本的見方／日本的「世界内存在」

（造化に従い、四時を友とす by 芭蕉）

自然の中には内面の自由性が入っている
東洋の自然はものをそのものたらしめる

自然のそのままの受容
物心一如

西洋的見方／西洋的「世界内存在」

西洋の考え方は二元から始まる

（科学的機械的進歩 ➡ 自然と対立・征服…）

主観と客観　物と心　有と無

本質と現象　存在と価値　善と悪

美と醜　神と人間　聖と俗

上田閑照先生

「西田幾多郎」研究

上田閑照著

『西田幾多郎とは誰か』

（岩波現代文庫）

世界内存在（In-der-Welt-sein）

―問題としての3つの世界―

生活世界（人生）
歴史的世界（歴史的社会的生）
生死界（境涯）
※（ ）は上田先生

自己とはいかなる存在か

禅と哲学への2つの関心

禅とは何か、哲学とは何か

西田という一人格の場
禅と哲学の双方向の問いの磁場
禅と哲学の動的結びつきの研究
純粋経験の哲学

↓

『善の研究』（41歳、1911年）

原始原初の純粋経験

たとえば
色を見、音を聞く刹那・・・

未だ主もなく　客もない（主客未分）

光になり切っている

西田哲学　vs　西洋哲学

大本の原始原初の
純粋経験から出発

流派に分れる

ex.

直接的原経験
真実在の根底
真の自己の根源
⋮

形而上学
経験論
実存哲学
⋮

純粋経験の自発自展

－内発的自己展開－

未分に直接する「感覚(知覚)」

↓

未分を分節する「思惟」

↓

再統一運動する「意思」

↓

全体として観取する「知的直観」

自己変容循環